148
675

011433−000−4

特２０−９２８

御代のほまれ　巻の２

落合　直文／著

M２８

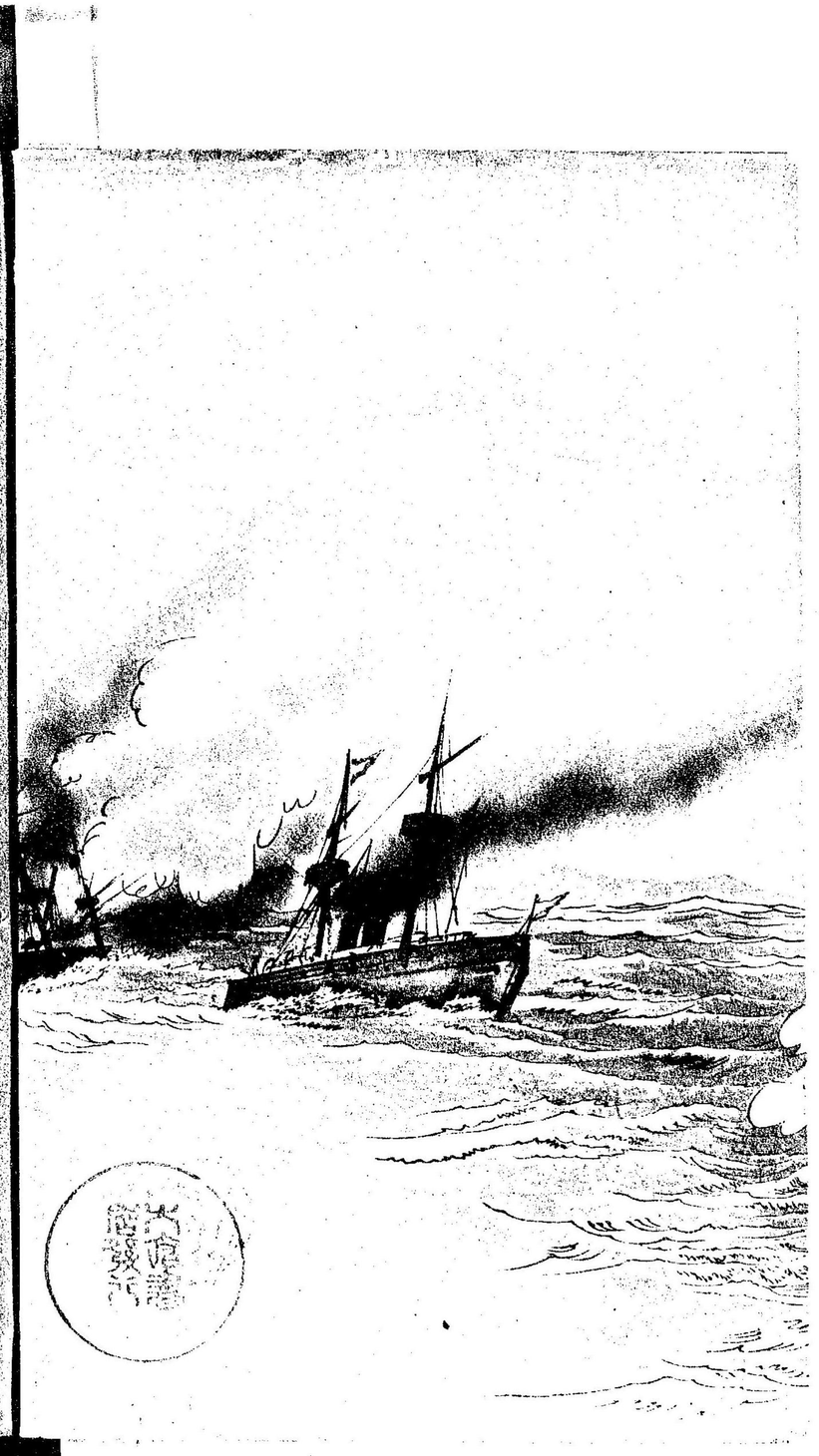
AAE−３１０１

925

御代のほまれ

第一目次

開戰の動機
日清戰三國干渉附占領地
第一　わが國民　第二　朝鮮との關係
第三　甲申のみだれ　第四　天津の條約
第五　金玉均　第六　東學黨のおこり
第七　大島公使　第八　我國の出兵
第九　韓廷へのわが要求　第十　わが兵韓宮に入る
第十一　豐島海　第十二　成歡牙山
第十三　凱旋式　第十四　わが艦威海衛をふさぐ
第十五　大同江　第十六　平壤

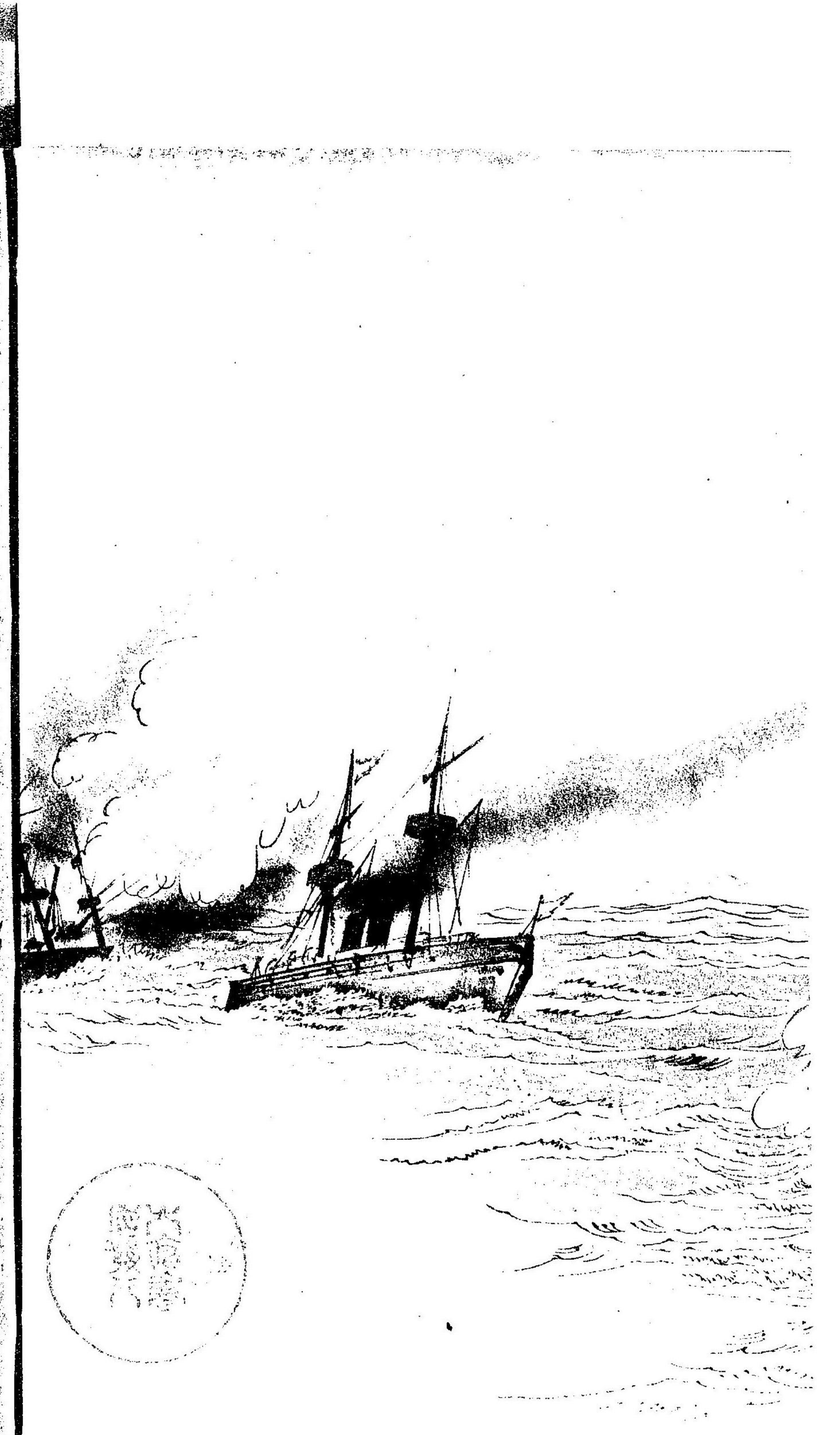


特20
928

御代のほまれ

第一目次

開戰の勅語
日清韓三國圖附占領地
第一　わが國民
第二　朝鮮との修交
第三　甲申のみだれ
第四　天津の修約
第五　金玉均
第六　東學黨のおこり
第七　大鳥公使
第八　我國の出兵
第九　韓廷へのわが要求
第十　わが兵韓宮に入る
第十一　豐島海
第十二　成歡牙山
第十三　旋式
第十四　わが艦威海衛をおそふ
第十五　大同江
第十六　平壤



詔勅

天佑を保全し萬世一系の皇祚を踐める大日本帝國皇帝は忠實勇武なる汝有衆に示す

朕茲に清國に對して戰を宣す朕か百僚有司は宜く朕か意を體し陸上に海面に清國に對して交戰の事に從ひ以て國家の目的を達するに努力すへし苟も國際法に戻らさる限り各々權能に應して一切の手段を盡すに於て必す遺漏なからむことを期せよ

惟ふに朕か即位以來茲に二十有餘年文明の化を平和の治に求め事を外國に構ふるの極めて不可なるを信し有司をして常に友邦の誼を篤くするに努力せしめ幸に列國の交際は年を逐ふて親密を加ふ何そ料らむ清國の朝鮮事件に於ける我に對して著著鄰交に戻り信義を失するの擧に出てむとは

朝鮮は帝國か其の始に啓誘して列國の伍伴に就かしめたる獨立の一國たり而して清國は毎に自ら朝鮮を以て屬邦と稱し陰に陽に其の內政に干涉し其の內亂あるに於て口を屬邦の拯難に藉き兵を朝鮮に出したり朕は明治十五年の條約に依り兵を出して變に備へしめ更に朝鮮をして禍亂を永遠に免れ治安を將來に保たしめ以て東洋全局の平和を維持せむと欲し先つ清國に告くるに協同事に從はむことを以てしたるに清國は翻て種々の辭柄を設け之を拒みたり帝國は是に於て朝鮮に勸むるに其の秕政を釐革し內は治安の基を堅くし外は獨立國の權義を全くせむことを以てしたるに朝鮮は既に之を肯諾したるも清國は終始陰に居て百方其の目的を妨碍し剩へ辭を左右に托し時機を緩にし以て其水陸の兵備を整へ一旦成るを告くるや直に其の力を以て其の欲望を達せんとし更に大兵を韓土に派し我艦を韓海に要擊し殆と亡狀を極めたり則ち清國の計圖たる明に朝鮮國治安の責をして歸する所あらさらしめ帝國か率先して之を諸獨立國の列に伍せしめたる朝鮮の地位は之を表示するの條約と共に之を蒙晦に付し以て帝國の權利利益を損傷し以て東洋の平和をして永く擔保なからしむるに存するや疑ふへからす熟々其の爲す所に就て深く其の謀計の存する所を揣るに實に始めより平和を犧牲として其の非望を遂けむとするものと謂はさるへからす事既に茲に至る朕平和と相終始して以て帝國の光榮を中外に宣揚するに專なりと雖亦公に戰を宣せさるを得さるなり汝有衆の忠實勇武に倚賴し速に平和を永遠に克復し以て帝國の光榮を全くせむことを期す

御名御璽

明治二十七年八月一日

詔勅

天佑を保全し萬世一系の皇祚を踐める大日本帝國皇帝は忠實勇武なる汝有衆に示す

朕茲に清國に對して戰を宣す朕か百僚有司は宜く朕か意を體し陸上に海面に清國に對して交戰の事に從ひ以て國家の目的を達するに努力すへし苟も國際法に戻らさる限り各々權能に應して一切の手段を盡すに於て必す遺漏なからむことを期せよ

惟ふに朕か即位以來茲に二十有餘年文明の化を平和の治に求め事を外國に構ふるの極めて不可なるを信し有司をして常に友邦の誼を篤くするに努力せしめ幸に列國の交際は年を逐ふて親密を加ふ何そ料らむ清國の朝鮮事件に於ける我に對して著著鄰交に戻り信義を失するの擧に出てむことは

朝鮮は帝國か其の始に啓誘して列國の伍伴に就かしめたる獨立の一國たり而して清國は毎に自ら朝鮮を以て屬邦と稱し陰に陽に其の內政に干涉し其の內亂あるに於て口を屬邦の拯難に藉き兵を朝鮮に出したり朕は明治十五年の條約に依り兵を出して變に備へしめ更に朝鮮をして禍亂を永遠に免れ治安を將來に保たしめ以て東洋全局の平和を維持せむと欲し先つ清國に告くるに協同事に從はむことを以てしたるに清國は翻て種々の辭柄を設け之を拒みたり帝國は是に於て朝鮮に勸むるに其の秕政を釐革し內は治安の基を堅くし外は獨立國の權義を全くせむことを以てしたるに朝鮮は既に之を肯諾したるも清國は終始陰に居て百方其の目的を妨碍し剩へ辭を左右に托し時機を緩にし以て其水陸の兵備を整へ一旦成るを告くるや直に其の力を以て其の欲望を達せんとし更に大兵を韓土に派し我艦を韓海に要擊し殆と亡狀を極めたり則ち清國の計圖たる明に朝鮮國治安の責をして歸する所あらさらしめ帝國か率先して之を諸獨立國の列に伍せしめたる朝鮮の地位は之を表示するの條約と共に之を蒙晦に付し以て帝國の權利利益を損傷し以て東洋の平和をして永く擔保なからしむるに存するや疑ふへからす熟々其の爲す所に就て深く其の謀計の存する所を揣るに實に始めより平和を犧牲として其の非望を遂けむとするものと謂はさるへからす事既に茲に至る朕平和と相終始して以て帝國の光榮を中外に宣揚するに專なりと雖亦公に戰を宣せさるを得さるなり汝有衆の忠實勇武に倚賴し速に平和を永遠に克復し以て帝國の光榮を全くせむことを期す

御名御璽

明治二十七年八月一日

自序

田鶴舍漫錄とは、おのが父のしるせる隨筆なり。父は、去年の十二月うせしかば、遺稿などまとめむとて、とりいで見しに、慶應二年三月の條に、左の文あり。

長崎にあるところ、ある英國人をおとづれしことあり。その人、種々の物語の末に、日本人は武勇の氣象に富めり。いかにして、かゝる氣象に富めるかと、心ひそかに怪みてありしに、そは全く家庭の教育にもとづけることを知れり。

ある日、市中を散歩せるに、五歳ばかりの男の子、石につまづきて仆れたり。いたく泣きさけびて、家にいりしが、うちより母なる人出でき て、いづれの石につまづきしかといふに、その子は、かれなりと指ざす。にくき石ぞといひざま、かの母は、はしりゆきて、その石をうつこと、ふたつみつ。これにてよからむといふに、はやくも泣きをやめて、うちよろこべり。かゝることは、よその國にはあらぬことなりとて、賞歎するさま、その面にあふれたり。われらには、平

生見なれ居ることなれば、なにとも思はざれど、かれらの目には、實にめづらしとも思ひたらむ。

この英國人のことばの如く、我國人の武勇の氣象に富むは、家庭の教育、大にあづかりて力あるなり。さるに、維新このかた、風俗やうやく軟弱におちいり、したがひて家庭の教育なども、たゞおとなしくのみあれかしとをしへ、いさゝかにてもあらあらしきことあれば、野蠻とのゝしり、未開とうしるにいたれり。かくては、我國民の特有

なる武勇の氣象も、遠からず、そのあとをたつにいたらむと、心あるものはいたく歎きてぞありし。さるに、征清の大みいくさおこりしより、俄にそのさまをかへ、今や武勇の氣象は、天下にみちみち、兒童のしわざ、なほ見るべきものあるにいたれり。試みにおもへ、小學生徒の唱歌は、おほくは軍歌になれるのみならず、樽拾の小僧、子守の子娘にいたるまで、戰爭にかゝはれる歌をうたひ行くにあらずや。上野山飛鳥山の運動會にも、豚を放ちて、そを逐ひ、豚尾漢のかたちをつくり

て、そをきりやぶるなど、戰爭にちなめる遊戯をなすにあらずや。机上には戰爭の記錄どもをのせ、手箱には軍人の寫眞をいれ、雙六も、戰爭の雙六、羽子板の繪も、凧の繪も、戰爭の繪を好めり。チャンチャンは着ることイヤと怒る子あれば、月琴はナラヒタクナイと泣く子もあり。弟は、軍人帽を買ひてたべと、父にせまれば、姉は凱旋かざしをと、母にたのむ。今日の日曜には、動物園の駱駝見に行かむ。明日の祭日には、遊就館の分捕品見に行かむと、いづこの兒童もいさみたてるさ

まなり。新聞を見れば、納豆を賣りて、軍費を獻金せし商家の子もあり。雜誌を見れば、草鞋をつくりて、そををさめし農家の子もあり。菓子には支那微塵といふ菓子あり。團子にも亦勝利團子といふ團子あり。買ふ子なくば、賣る人もなからむ。かゝる菓子團子、賣りゆく見ても今の兒童の志のほどは知られなむ。あはれ、こを六七年前、頸に襟卷をまとひ、頭に頭巾をかぶり、目には眼鏡をかけ、手には手袋をはめ、顏色の青白かりし兒童どもにくらぶれば、其差いかにぞや。こはこれ皆

戰爭の賜なり。武勇の氣象は、國家を維持する一大要素なり。兒童をして、ますますこの氣象を養はしめざるべからず。この氣象を養はしめむには、こたびの戰爭の轉末を知らしむるなどやよろしからむ。またかの漫錄中、昨年の八月の條に、兒童に關する一文あり。

ある日の夕つかた、青山の練兵場を過ぎぬ。場のなかほどに、かたちめでたき姉弟の二兒たてり。兩の手にあまたの撫子をもてり。うるはしきその花よ、いづこより折りきたるかとい

ひしに、後のかたの家を指ざすは、そこよりもらひたるなるべし。その花の名を知るかといひしに、撫子なりと答ふ。さなり、されど、その撫子に名あり。右の手なるは大和撫子にて、左の手なるは唐撫子と教ふるや、この二人は、なにかさゝやき居たりしが、やがて左の手なる花をばすてゆきぬ。たのもしき兒等よと思ひしまゝ、かの指ざしたる家にたちよりてきけば、そはある武官の子なりとなむ。

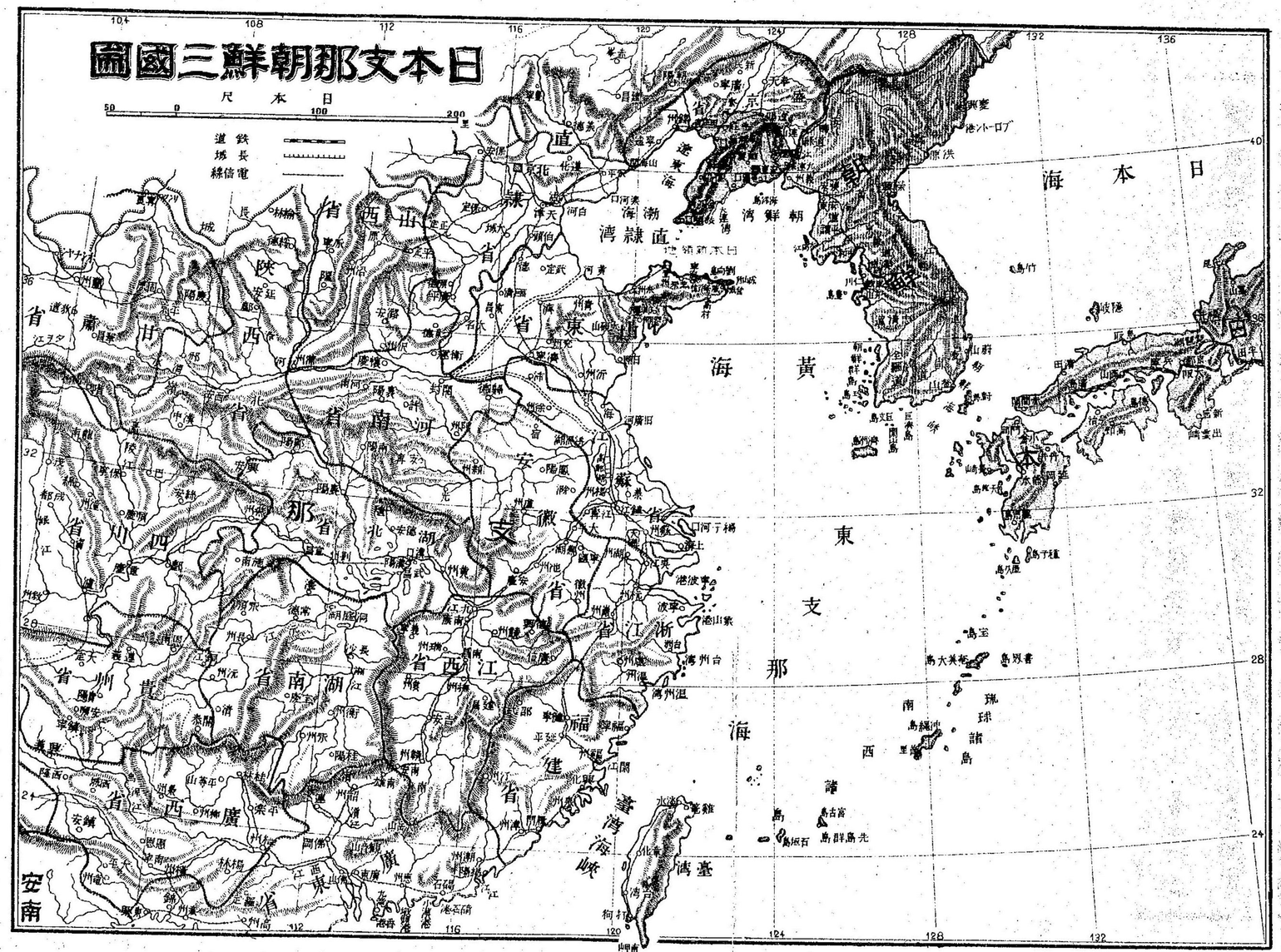
れのれのこの書をあらはしたるも、こをよみて、

かゝる兒童の世に多からむことを望むにほかならざるなり。

明治二十八年三月十七日

皇后陛下廣島の大本營へいでたゝせ給ふ朝

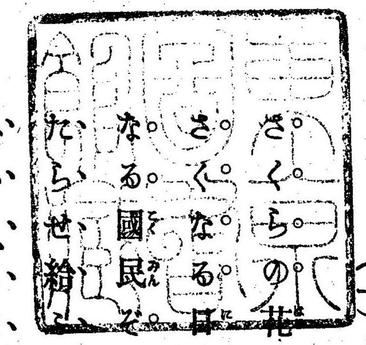
萩の家主人　落合直文識


日本支那朝鮮三國圖
日本尺
道鉄
堡長
線信電
日本海
黄海
東支那海
朝鮮灣
渤海灣
直隸灣
臺灣海峽
南琉球諸島
西表
直隸
奉天
吉林
黑龍江
山東
河南
陝西
甘肅
四川
湖北
湖南
貴州
雲南
廣西
廣東
江西
安徽
江蘇
浙江
福建
臺灣
安南
京畿
平安
咸鏡
黄海
江原
慶尚
全羅
忠清
朝鮮
長崎
福岡
山口
廣島
岡山
大阪
京都
名古屋
東京
仙台
函館
札幌
旅順
大連
青島
上海
南京
漢口
重慶
成都
昆明
廣州
香港
臺灣
基隆
高雄
澎湖島
琉球
沖縄
宮古
八重山
大東島
小笠原
硫黄島
台湾
海南島
海参威
ウラジオストク
ポートアーサー

御代のほまれ卷の一

落合直文著

一　わが國民



さくらの花は、我國にのみさく花なり。この花のさくなる日本國こゝにすめる國民は、そもいかなる國民ぞや。二千五百有餘年、たゞ一すぢにわたらせ給ふ天皇を上にいたゞき、忠君愛國の情ふかくことある時は、いのちをすつるをなにともれもへらず。この精神やがて日本魂とはいふ。

なりけり。本居宣長翁のうたに、しきしまの大和心を人とはゞ朝日にほふ山さくら花とあり。この歌よくこの精神をうたひつくしたりとやいはむ。

皇祖神武天皇、海内をたひらげ給ひしより、わが日本國は、いまだ他國のあなどりもうけしことなかりしなり。たゞになかりしのみならず、神功皇后は、女の身におはしながら、出でゝ三韓をうちこらし給ひ、北條時宗は、こゝにありて、よせきたりし元の大敵をうちしりぞけ、太閤秀吉は、將士を朝鮮にやりて、かしこをふみちらし、共に國光を海外にかゞやかしたるなど、そのさま櫻花の風のまにまに千里のほかにほひゆきしがごとし。こゝに、こたびの征清軍のごときは、さくらなすやまとごゝろを、清國にしらしむるのみか、實に御代の春を、世界にしめす時のめぐりきたりしものなり。

かれ清國なにものぞや。朝鮮をおのが屬國の如くおもひ、そをすゝめて、われにうむかしめ、以て無禮を加へしこと、そのいくたびなるかを知ら

ず。われは東洋の平和をおもひ、ゆるさるゝかぎりは、ゆるしてありしに、かれが暴狀はますますはなはだしく、朝鮮の獨立さへ、まさにあやうからむとするにいたれり。今にして、そをこらさずば、遂に我帝國の躰面をけがすにいたらむ。これ征清軍の起りしゆゑよしなり。のどけき春の光りをも、知らで、冬ごもるかれらの頑愚にくむべしとはいひながら、またあはれむべきかぎりなこそ。

事すでにこゝにいたれり。しばしもためらふべきにあらず。いでものの見せんと、わが軍人はいまだ海をわたらざるに意氣はや、四百餘州を呑めり。花はさくら、人は武士わが軍人は花となりて散らんと欲せり。この軍人の、鋭鋒には、なにものか敵せむ、なにものかあたらむ。あはれ、やまとごゝろの櫻花、朝日にほふ時きたれり。われわれのよろこびしるさむとするものこゝばをしらずなむ。

(二)朝鮮との修交

たびの征清の大みいくさは、またく朝鮮國の

ためにおこれるなり。さては、まづ我國と朝鮮國との關係を知らざるべからず。その關係のおもなるもの五つあり。

明治のはじめつかた、わが政府は、しばしば使をやりて、まじはりをもとめしに、かれきかず。これより征韓の議朝野にかまびすしく、明治六年、陸軍大將參議西鄕隆盛氏の如きは、みづから兵をひきゐて、かれを討たむと主唱せり。されど木戸孝允、大久保利通の二氏、それに反對せしかば、その議遂に行はれずなりぬ。これ、關係のひとつなり。

明治八年、海軍少佐井上良馨氏、朝鮮近海のさまをさぐりつゝ、まさに、清國牛莊に赴かむとす。みちに京城の河口なる江華島とやらむによりて薪水をもとめしに、はからずも、かの砲臺より砲擊をうけたり。わが兵、やむをえず、これに應戰して、遂にこの砲臺を拔き、永宗城を燒き韓兵をてろし、武器を奪ひてそのまゝ艦をかへしたり。これ關係のふたつなり。

あくる年の九年一月、參議開拓使長官黑田清隆

氏は特命全權辨理大臣に、議官井上馨氏はその副になりて、朝鮮におもむき、修交の條約をもとめ、かつ、江華島より砲擊せしことを責む。この時、國王の父なる大院君、身は朝にあらざりしかど、かげにありて政權をとれり。この人、しきりに開國のよろしからぬむねをいひしかば、人々おほくは、その論にしたがひ、要求の期日にいたるも猶その答をなさず。こゝに、大使は袂をはらひて、皈途につかむとせしに、右議政朴圭壽等、大にてをなげき、大院君をはじめ、他の反對者をどきふ

せ、遂にわがいふが如く、條約をむすび、かつかの砲擊につきて謝罪狀を出だせり。こはこれ、朝鮮を獨立王國として、はじめて世界に紹介せしものなり。かの禮曹參議金錡秀使節となりて、わが國にきたりしも、われより、花房義質氏代理公使として、京城にゆきしも、皆この條約の結果なり。これ關係のみつなり。

大院君、攝政として、鎖國の主義をとりしが、國王、長ずるにおよび、政權は、いつしか外戚の閔氏にうつりぬ。かくて、朝にある人々のうち、開國の主

義をとれるは、やゝ、世界の大勢を知り、一方には、わが陸軍中尉堀本禮造氏をまねきて、兵士に新式の操練をならはしめ、また、一方には、金玉均、除光範して、我國の文物制度を見せしめたり。さらぬだに、不平にたへざりし大院君、こゝにいたりて、ますゝよろこばず。をりを見て、ことをおこさむと思ひわたりしに、たまゝ、閔氏の族に、兵士の食料を私せるものありけり。大院君、兵士を激して、夜ふけて、王宮にみだれいらしむ。兵士、王妃はのがれたれど、わが堀本中尉以下七人は、ためにころされたり。つゞいて、暴徒はわが公使館を襲ふ。花房公使は、部下二十八人とともに、圍をついて出でゝ、仁川にて、ふたゝび府兵におそはれ、奮鬪の後、からくして濟物浦にいたりつきぬ。こゝに、英國測量船にすくはれ、わづかに長崎にかへるを得たり。こは十五年七月のことなりけり。これ關係のよつなり。

このこと、わが政府にきこゆるや、外務卿井上馨氏をして、下關におもむかしめ、さらに、高島陸軍

少將、仁禮海軍少將をして、兵二中隊をひきゐ、花房公使を朝鮮に護送せしむ、かくて、かしこの公使李裕元等と會して、遂に條約六欵をさだむ。そのとしの十月、朴泳孝、朝鮮の特派全權公使として、わが國にきたり、ひたすら罪を謝せしかば、わが政府は、更に竹添進一郎氏を辨理公使として、京城にとゞまらしむ。これ關係の五なり。

以上にのべたるごとく、朝鮮のありさまは、晴雨さだめなき空ありしが、こゝにまた、一大隱雲のわだかまれるものあり。そはまたなに事ぞ、といふに、かのわが公使館襲撃のをり、清國政府は、にはかに、兵をいだして、かの大院君を、その國につれかへりたること、なり。大院君、已に清國にあり、朝鮮政府は、開國の主義をとりながら、その實、なほ、清國の屬邦たる關係をまぬかれざりしなり。こゝに、日清兩國は、おの〳〵、兵をいだして、かたみに相備へたり。この陰雲よ、遂にまた雨ともならむ。風ともならむ。

(三)甲申のみだれ

かの朝鮮京城の變、ひとたびをさまりてよりは、

日韓兩國の間、やうやく親密となれり。されど、かの政府のうちには、二の黨派ありて、互によからず。二の黨派とはなにぞ、一は開國黨にして、一は鎖國黨なり。開國黨はわが國をたのみ、鎖國黨は清國をたのめり。開國黨は、日本黨にして、鎖國黨は支那黨なり。開國黨は、鎖國黨なる閔氏の一族が政府の要部をしめ居るをいきどほり、をりを見てそをはらはむと思ひわたれり。

明治十七年十二月四日、京城郵政局開設の宴あり。この夜、開國黨のかしらともいふべき、洪英植、朴泳孝、金玉均等、にはかにたちて閔泳翊を傷け、たゞちに王宮にせまりて、閔台鎬をはじめ、おほくの人々を殺せり。あくる朝、開國黨は、大政一新の令をくだし、金玉均、朴泳孝等は、要務の大臣となるなど、政權全くこの黨に歸しぬ。

朝鮮內部のあらそひ、此の如くなるに、こゝに又。かの陰雲はうごきそめぬ。我公使は、この時、韓王のこふがまゝに、兵百餘をひきゐて王宮をまもれるに、清將袁世凱、兵二千をひきゐて、王宮にせまりきぬ。こゝに、韓國兩黨のあらそひは、變じて

日清兩國のあらそひとなれり。韓王は、たすけをわが兵にもとめながら、戰酣なるころ、ひそかにのがれて、清兵のうちに入りぬ。韓王はや清兵のうちにいれり、わが兵、王宮をまもらむの要あらねば、すてゝ去りしに、みちに、清韓兩國の兵、あまたせまりきぬ。我兵、命のかぎりたゝかひしかど、衆寡敵せず、遂に敗れて走りしのみならず、公使館さへやきすてられたり。韓兵のおろかなるは、どがめずもあらむ、清兵の無禮にいたりては、こをなにとかいはむ。陸軍大尉磯林愼三氏の京城の外にありて、たふされたるもこの時なり。この「うらみ」、わが國民の情とし、いかでかはらさでは「あられむ」しばしまて、かの清兵。

(四)天津の條約

その後、井上大使等のきびしき談判によりて、朝鮮とのことどもはをはりぬ。されど、かの變亂の時、清兵のために京城在留の日本人にして、ころされたるものおほく、またその婦女にして辱められたるものもありしかば、清國に對しては、また默すべくもあらず。こゝに、當時の宮内大臣伊

藤博文氏は、特派全權大使となり、農商務大臣西郷從道氏とともに清國におもむきぬ。清廷は、兵部尚書直隷總督李鴻章に全權をゆだね、四月三日、天津におきて、その談判をひらきぬ。われよりは、種々の要求をなしゝに、かれは容易にきゝいれず。わが大使はその歩をゆづりて、わづかに左の三款を約するを得たり。

その一、もと日清兩國より朝鮮に屯在せしめたる兵士を、互にひきさること。

その二、朝鮮國の軍事教練のために、日清兩國より教官をやらざること。

その三、この後、事ありて日清兩國、兵を朝鮮につかはさむとする時は、互にそのむねを照會すべきこと。

世に天津條約といふは、すなはちこれなり。この條約の如きは、わが國のためにはきはめて汚辱をうけたるものなり。兵はころされ、民は辱められ、そをかれにむかひて責むること能はず、それのみならず、朝鮮との親交をさへ失へり。實にくちをしきことのかぎりならずや。ことに、清將袁

世凱は、ほどなく、朝鮮公使となりて、ながく韓廷の權勢を左右するにいたれり。うらみの上のこのうらみ、なにの時かわすれむ、いつれの時かわすられむ。

(五)金玉均

世に金玉均の生涯ほど、あはれなるものはあらじ。國亂れて救ふ能はず。空しく孤忠をいだきて、他邦にさまよひ、遂に一刺客のためにたふされたり。金玉均の靈、地下にありてなほ冥ぜざるも、のあらむ。

金玉均は朝鮮の名士なり。明治十七年の亂には、一方の領袖となり、當時ほしひまゝなりし閔族をたふして、國政をあらためむと、のぞみたりしも、その功まさに成らむとして、忽ち清國兵のためにさまたげられ、朴泳孝、徐光範等と共に本國を逃れぬ。徐は米國にはしり、金と朴とは日本に來れり。金はわが國に流寓すること殆十年、あるは南洋のはなれ小嶋にさびしき月をながめ、あるは北海の空に寒けき、かりの聲をききしこと、もありけり。その間、つねに故國の衰運をなげき

國を憂ふる涙つきもやらず。わが國人も、その志をあはれむもの多かりしが、朝鮮の廷臣はいかに、こをおそれたらむ。金朴の徒死せざる間は、心安からずとて、ひそかに二人を殺さむとはかれり。

朝鮮人に李逸植といふものあり。久しく大坂にありて、米商等と交りねしが、また、をりをりは金朴等にもあへり。この者こそ實に殺害の主謀者にして、朝鮮政府は、このために七万五千圓の金を費したりとなむ。李逸植は清國李鴻章の男、李經芳して、金玉均を上海に呼ばしむ。李逸植はじめは共にゆかむといひしが、のち洪鐘宇に、はかりごとを授けて、おのれに代りてゆかしむ。神戸をいでたちしは、廿七年三月のことなりけり。その月の廿八日、その一行は上海につきぬ。金玉均の死は、はや旦夕にせまれるを、神ならぬ身のいかでか知らむ。そこなる日本ホテルの二階にやどれりしが、洪鐘宇は人なきをりをはかりて、短銃をうちはなちぬ。金玉均は血にまみれながら、たちあがりしが、ふたゝびひゞく銃の音、烟は室。

内にみちみちたり。あはれその烟の散ぜるもまたで、金玉均のいきは、たえにけり。いかにあはれなることならむ。さて又李逸植は、わが東京にて、朴永孝を殺さむとくはだてたりしも、事あらはれて縛につけり。

洪鐘宇は、そのあくる日、上海警察のために捕はれぬ。この審判いかにと、世の人まちわたりしに、あなあやし、遂に罪なしとてゆるされたり。それのみならず、清國軍艦は金玉均の死骸と洪鐘宇とをのせて、こを朝鮮におくれり。洪は直に重き職に用ゐられ、金の、死骸は、寸斷せられて、揚華津のほとりにさらされたり。雨のあした風のゆふべ、魂魄いかにまどふらむ。おもへば、悲しききはみなりけり。

(六)東學黨のおこり

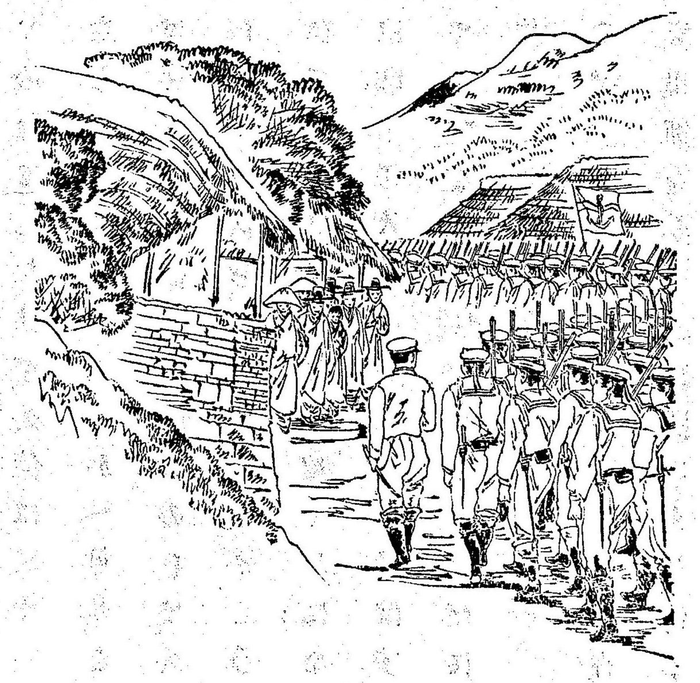
五月やみ、あやめもわかぬは、朝鮮の内情なり。國王はあれどもなきが如く、かの閔永駿は、おのが家より皇后をさへ出だしゝをもて、ますます政を專にし、常に清國の公使、袁世凱と相はかりて、よからぬことゞもをたくめり。國民はじめのほ

どは、しのびてありしが、わが明治二十七年五月にいたり、遂に兵をこゝかしこにあげたり。いはゆる東學黨といふものこれなり。その勢、おひおひ盛になりしが、六月一日には、進みて全羅道の首府なる全州を陷れぬ。こゝに袁世凱は、巧に関永駿を說き、清國の兵をいだして、一時の急を救はむことをすゝむ。そは袁が心の中には、こたび東學黨をうちほろぼし、ゆくゆくは朝鮮を清國の一省となして、おのれ、その總督たらむとおもへるなり。かくて、清國は、直に千五百の兵を朝鮮

におくりぬ。その東學黨の巢窟ときこえし牙山といふ地に上陸せしは、その月の八日なりとなむ。朝鮮の內情を、五月やみにたとへむには、東學黨をば、時を得がほに鳴きいでたる杜鵑にやたとふべからむ。あはれ血になく聲の、八道にきこえしより、いよいよ五月雨ふりしきりぬ。そのほどゝきすの聲や、うれしときゝし人は、なからむも、またあはれときかぬ人もなかりしならむ。こゝに金玉均の如き、かなしき死をとげし人のためには、よき手向の聲なりしならむ。

(七)大鳥公使

わが政府は、清國の、兵を朝鮮にいださむとするをきゝ、我もまた兵をいださむと決しぬ。その前、まづ公使をつかはしおかむとて、六月五日、當時歸朝して、病を大磯に養へる大鳥圭介氏を、直に朝鮮にむかはしむ。公使はこの日、横須賀より軍艦八重山號にのりて、參謀本部員および海軍兵團六十名と共に、午後四時過ぐるころ舟出しぬ。おなじき九日の夕つかた、恙なく仁川につきしが、あくる十日の朝まだき、ふりしきる雨をつきて京域へ赴きぬ。さて朝鮮政府は、公使入京のことをきゝて、あわてふためき、急に李善德、閔商鎬などを仁川へつかはし、公



使の入京をとゞめむとしたれど、公使ははやいでたちたる後なりければ、そのまゝかへりぬ。こゝに於て、政府は更に李容植といふものして、公使を途に要せしむ。すなはち龍登といふところにて、公使にあひて、京城はすでにおだやかになりぬ。されば、今は閣下の入京を煩はすに及ばずといふ、その辨やゝ巧なり。されど公使は答だにせず、そのまゝ進みて京城に入りぬ。

こえて、十二日の晝すぐるころ、大鳥公使は、巡査五名を隨へて袁世凱を訪ひ、三時間あまり、何事かうちかたらひて、わかれぬ。この日、夜に入りて仁川より報あり。わが陸軍兵は、和歌浦丸にて午後四時すでに仁川につきぬ。夜ふけて、京城へうちむかはむ」とのことなりしかば、京城なる陸戰隊は、俄にそれといれかはることゝなれり。ある人のうたに大鳥の、羽風や遂にはらふらむとり、のはやしにかゝる村雲」とあり。その村雲とは何をいへるにか、東學黨か、はた韓廷か、いないなこは支那兵をさせるならむ。歌はよしとにはあらねど、當時にありては、誰もかくこそおもひしか。

(八)我國の出兵

六月五日、わが政府は出兵の命を第五師團に下す。師團長、陸軍中將、野津道貫氏は直にその命を奉して、充員召集の令をいだしぬ。かくて、同師團の中より混成旅團をつくり、松山分營なる第九旅團長、陸軍少將大嶋義昌氏を、その長として、まさに朝鮮へむかはしめむとす。また政府は參謀本部の出張所を、馬關に設け、兵站兼碇泊場司令部、野戰兵砲廠、集積場、集積倉庫および貨物廠などをもおきぬ。なにくれと出師の準備といふのひ

しかば、その月の九日の朝まだきより、幾多の軍用船は、舳艫相ふくみて宇品港をいでぬ。第一回の出兵、既にをはるや、第五師團は、更にまた充員召集の令をいだしぬ。かくて十四日の夜、肥後丸酒田丸は兵士および糧食など載せて、こも宇品港をいでぬ。

おのれ等、史をよみて、豐太閤朝鮮征伐のところにいたる毎に、常にその世に生れざりしことをのみ歎きしに、なほそれよりも壯快なること、今まためぐりきぬ。一死以て、國に報ゆるは、この時

をおきて、またいつかあらむ。今、前後に舟出した。る軍人らの心のうち、そのうれしさはいかに、船窓より、波路はるかに、富士の高根をながめつゝ、その高ねのたかきほまれを、あげむとて、誰も勇みたるなるべし。

かくて六月十二日、先發兵は既に仁川につきぬ。後軍またつゞきて到着せり。旭のみはた、仁川灣頭にひるがへり、八道の草木、この旗の手になびきふしなむとす。大嶋旅團長は、まづ兵を二手にわかち、一手は仁川にとゞめて、居留民をまもらしめ、一手は直に京城へと進ましむ。また九峴山といふは、京城と仁川との間にありて、つゝらをりの山路、いとけはしく、北には桂陽山そびえ、南には蘇乘山そばだちて、頗る要害の地なるを以て、こゝにも兵をとゞめき。見わたせば、四千あまりの兵は陸にありて、こゝかしこをいましめ、松嶋、吉野、大和、武藏、高雄、千代田、筑紫、赤城、鳥海、八重山の諸軍艦は、海をおほひて威風を示せり。その壯觀、拙き筆にはつくすべくもあらず。

(九) 韓廷へのわが要求

東學黨は、五月の末つかたより、六月のはじめつかたにかけて、その勢いよいよつようなりぬ。朝鮮政府は招討軍といふをやりて、そをうたしめしが、遂にそのかしらをころし、その徒五百餘人を屠り、からくして、全州をとりかへしたり。こゝに杜鵑山にかへりて、五月雨やゝふりやみぬ。東學黨の勢を考ふるに、招討軍のごとき、あたるべしともおもはれず。さるに、かくはやく、そのあとををさめしはいかに。こは、この時、牙山に支那兵の屯するあり。仁川京城には、わが兵のあるあり。これにおそれて、かゝるさまになりたるなりといふ。さはいへ、東學黨のそのあとををさめたりといふは、たゞ一時のみ。かれは韓廷の虐政を憤りて起れるものなり。この虐政のやまざるかぎりは、をりを見てまた起らむとするは、見やすきことならむ。

そをそれとしらず、韓廷および清國政府は、東學黨ははやをさまりたりとて、我に兵をひきあげむことを望む。われはきかず、さらに清國と力をあはせて、朝鮮の弊政をあらためんため、その獨立を全

うせしめむとて、清國政府にむかひて、左の要求をなしぬ。

日清韓三國は、土地相接し、ほとほと唇と齒との關係をもてり。故に、朝鮮のみだれは、やがてわれわれの利害におよぶものなり。さるに朝鮮のちかごろのありさまを見るに、實にいふべからざるものあり。今の時にあたりて、こをすくはむは、貴我兩國のまさにつとむべきところならむ。よろしく兩國の協議により韓廷にすゝめて、もろもろの政法をあらためしめ、以て百年の大計を定めしめざるべからず。われのかくいふは他のこゝろあるにあらず。朝鮮の獨立をたすけて、東洋の平和をたもたむことをこひねがふのみ。

かゝるねもごろなる要求に對し、清國はなにとかこたへし。かれは東學黨はやをさまりたれば、互に兵をひきあげむ。韓廷に對しての勸告には、應することを能はずといへり。その無禮、無法、いかにぞや。わが大鳥公使はそれらにはかゝはらず、直に左の改革意見五條を韓廷におくりぬ。

その一、中央政府の制度より、地方制度にいたるまで、適宜改革をくはへ、人材を撰拔すべき事。

その二、財政をとゝのへ、富源をひらくべき事。

その三、法律および裁判の法を整頓すべき事。

その四、すみやかに兵備警察を整理し、國内の變亂をしづめ、あはせて國家の安寧を保持すべき事。

その五、一般の學政をあらたむべき事。

條毎に、その方法さへかきしるしてありしかば、韓廷も大に心をうごかすところありしが、袁世凱にさへぎられて、決することと能はず。おもへば、朝鮮にわざはひするものは、閔氏にもあらず、東學黨にもあらず、この支那公使袁世凱その者なり。その後、しばしば韓廷にむかひて、せまりしに、かれは、口頭をもて、要求のおもむき大かたうけ給はりぬ。といひおこせたり。わが公使は、口頭にては、他日のあかしとすること能はず、さらに書面にていひおこすべきむねいひやりたり。さるに、韓廷の風雲俄にかはり、七月十八日、わが要求

は、承諾しがたきよしをいひおこせつ。かくて、袁はあくる十九日の夜半ばかり、やみにまぎれて、ひそかに京城をいで、いそぎ本國へむかひぬ。

大鳥公使は、いたく韓廷の無狀をいきどほり、さらに七月二十日、左の三條を要求したり。

その一、明治十八年の條約にもとづき、わが軍隊のために兵營をたつべし。

その二、屬國保護の名を以て、清兵をとゞめおくは獨立國たる躰面に關せり、よろしくその兵を去らしむべし。

その三、もし三日間にこれが確答をなさゞるときは、われよりしひて韓廷の改革をなさふべし。

その二十二日は、韓廷がわれにこたへざるべからざる日なり。その夜、閔の使ひきたりて、清兵は、もとわがこひによりてきたりしものなり。さるに、今、われより、そをひきあげむことを求むべからずといふ。かの杜鵑山にかへりて、五月雨のふりやみたるは、韓廷のためによろこぶべきことなれど、これよりは土さへさくといふ夏の日の

如き、支那政府の壓制をうけ、草も木もほとほと枯れゆかむとする、あり、さまとはなれり。われは、そを枯らさじと、朝夕かくる、その露を、めぐみとも思はず、かへりて、そをさけむとする韓廷のおろかさ、なにかたとへむ。公使は、こゝにいたり、内亂はやをさまりたるに、清兵の退ぞかざるは、必ずよからぬ望みをいだきてのことならむ。かくては王宮もいとあやふし、われみづから兵をひきゐ、そを守らむとて直ちに閔の使ひをかへしたり。

(十)わが兵韓宮に入る

七月二十三日、朝まだきより雨ふりきぬ。わが兵は王城を守らむとて進みぬ。まづ隊を二手にわかち、一手は橋本少佐これを率ゐて、後門なる彰化門へむかひ、一手は、森少佐これを率ゐて、西門なる迎秋門より入らむとす。さて橋本少佐の彰化門に近くや、一隊の韓兵は、俄に銃を放ちて我に手むかへり。我はもとより戰をなす意にあらざれば、空砲を放ちつゝ、そこをとほりぬけむとせしにぞ、韓兵いよいよ我を侮りて、砲擊ますま

すはげし。されば詮方なく我も砲撃をはじめしが、まもなくして、かれ等はにげ失せぬ。やがて、王宮の正門

なる光化門の樓上には、わが大隊旗のひらめくを見る。

また迎秋門より進みたる森少佐の一隊は、破竹の勢を以て、神武門に近よりしに、門かたくとざしたれば、入ることと能はず。こを大砲もてうちくだかむは、いとやすきわざなれど、かくては王宮をおどろかさむおそれあり。とやせむかくやせむと、ためらふうち、軍に從へる通辨者某、もてる火繩にて、すこしく門扉を燒き、やけたる跡に、刀もて穴を穿ち、身をちゞめて、内に入り、さて門を

ひらきたり。この機を得て、わが兵士は大波のう
ちよするが如く、先を爭ひて内に入りぬ。かくて、
森少佐は、玉座ちかくまゐり、謹みて、おのれらは、
陛下および王宮をまもらむとてまゐりし者に
はべれば、御心やすくおぼしたまへと、きこえあ
げしに、王は、やゝうれしきみけしきにて、そはか
たじけなし。されど、彰化門の方にあたりて、銃音
のきこゆるは、いかにぞやと、のたまひければ、少
佐、こは、おのれら王宮をまもらむとてまゐりし
を、妨ぐる者ありしかば、いさゝか、そを懲らさむ

とするなり。やがて、しづまりぬべければ、かまへ
て御心をな煩はし給ひそ。とまをしゝをもて、は
じめておちつき給ひぬ。
それより、國王は使を雲峴宮にやりて、大院君を
召させたまふ。大院君はじめは、そをいなみしか
ど、再三、ねもごろなる使の來れるまゝに、遂にい
なみえで王宮にまゐられぬ。王は御身、みづから
いでむかはせられ、久々にて父子對面あらせ給
ふ。王はあまりのうれしさに、しばし詞もなく、
て、たゞ涙のみ湛へたまひしを見て、わが將士ら

も。おもはず、袖をぬらしたりとぞ。そもそも、大院君と國王とは、父子の間にておはしながら、よかぬ、閔族どもに隔てられて、久しくあひ給はざりしを、今はわが將士、王宮をまもること、なりしかば、王にも、み心やすくぼして、さて父君にあひたまひしなりけり。あはれ、この時、父子の御よろこびはいかなりけむ。

程へて、わが大鳥公使は大禮服をつけて參内し、大院君と共に政治の改革、大臣の任免など議してかへりぬ。これより大院君は、夜に入るもなほ

王宮にとゞまり。奮て韓廷の政務を執れり。こゝに久しう、かゝりし鷄林の雲、全く晴れて世はまた、ほがらかなる空とはなりぬ。

(十一)豐島海

波の上に、龜のうかべるが如きは、豐島のおきなるショバイオール島といふ小島なり。わが海軍司令部長樺山資紀氏は吉野、浪速、秋津洲の三艦をひきゐて、七月廿五日午前七時ごろ、この島のわたりにかゝりしに、南陽灣のあたりに黑けぶりたなひけり。こなたざまにすゝみくるさまな

りしかば、ひとみをこらして見つめしに、こはいかに、清國の軍艦、濟遠と廣乙となりけり。この時、われはいまた京城廿三日の變をしらず、ゆゑに敵意をさしはさみながらも、なほその禮をつくさむとて、たかく將旗をかゝげたり。さるに、かの二艦は、これに答禮せざるのみか、かへりていくさの用意をなすさまなり。こゝは海づらいとせまく、進退もおもふまゝならねば、われはそのまゝ方向を西南へうつして、沖べに出でぬ。こゝに彼我やうやく近づきしに、かれは、俄に砲丸を放

てり。かれのふるまひ、すでにかゝり、われいかでかためらはむ。直にこれに應じて砲丸を放てり。一聲は一聲よりはげしく、筒のけぶりは忽ち海づらをおほひはてたり。かくすること、大よそ一時二十分、わが軍艦は三方よりたえまなくうちかけしに、かれはいかでかたへむ、濟遠にげ、廣乙またつゞきてはしりぬ。こを見るや、わが吉野艦は、速力をはやめて濟遠のあとをおひゆき、あまたの砲丸を、うち放ちぬ。かれは、淺瀨もえらばず、ひたにげにげしかば、今はおはむもかひなし

とて、ひきかへしぬ。後にてきけば、廣乙はカロリン灣の西隣なる小灣内の淺瀨によこたはりて、うち破れ、濟遠は、僅にのがれて威海衛につきたりとぞ。

をりしもあれ、またおきのかたより、二艘の舟すいみきぬ。一は軍艦にして一は運送船なり。わが秋津洲は直に進みて、その軍艦にせまりしに、かれはいかにおそれたちむ、一丸もはなたでそのまゝ降りぬ。こは、世にいふ操江號なり。こゝに今まで掲げありし黃龍旗は、いつしかとり去られて、艦上には、日の大御旗は、ひるがへれり。かくて、またわが浪速艦は、かの運送船にちかづき、空砲をはなちて、かれをおしとゞめ、さて、船内をあらためしに、この船は、實に英船高陞號にして、支那政府にやとはれ、かの兵、一千百餘をのせて、太沽より牙山へと進むみちなりけり。われは船長なる英人某にむかひて、わが艦にしたがひ來らばいかにとたづねしに、よろこびて、從はむといふ。さるに、清兵は、しきりに船長をおびやかして、わが命にしたがはしめず。今はいかにせむとて、一

發の砲丸を、かの機關室めかけてうち放てり。泣くこゑ、さけぶ聲、しばしはきこえしが、一千あまりの清兵をのせたる高陞號は、見るがうちに、豐島沖の水底にうちしづみぬ。こはこれ日清戰爭のはじめにして、國民のながく記臆せざるべからざるたいかひなり。あなめでたわが海軍大勝利。

(十二)成歡、牙山

朝鮮政府は、大鳥公使の意見をいれて、こゝに舊來の弊政をあらためたり。わが軍、この機を以て、直に牙山の清兵をつかむとて、七月廿五日午前十時、わが先鋒隊は古志少佐これを率ゐて、龍山なる旅團本部をいでたちぬ。その日の晝すぐるころ水原府に達しぬ。

あくる二十六日、昨日めしあつめつる朝鮮の人夫等、みな一夜のうちに、にげ去りたるを以て、わが先鋒隊は水原府を發することゝ能はず。古志少佐は、更に人夫を集めむと、力をつくしゝも、土人はいまだ韓廷の改革を知らざるをもて、日本軍に從ひなば、後、清兵のために、いかなるうきめを

見せられむもしれずとて、一人だも、これに應するものなかりき。とかくするほどに、後軍ははやこの地につきぬ。折から、京城なる大鳥公使より、朝鮮國王は、牙山の清兵をうちはらはむことを、わが軍にたのまれたる旨、および廿五日の豐島海、戰勝のことを、いひおこせたり。わが將卒、ことをきゝて軍氣さらに振ふ。この夜、古志少佐にはかに、病おこりて身まかりぬ。大軍の門出、この良將を失ふまことに、をしむべきことにこそ。

二十七日、用意とゝのひて、あさまだき水原府を發し、やくが如きあつさを冒して、振威につきぬ。

二十八日、こゝをたちいでゝ、午前十時、素砂場に入れり。こゝは成歡をさること、ほど遠からず。成歡は敵の、賴みて以て、我軍をさゝへむとする第一の堅壘にて、丘陵おき伏して、前に一帶の安城川をひかへ、見わたす、かぎり水田沼澤相つらなり、きはめて要害の地なり。わが軍、こゝを拔かざれば、以て牙山の敵をうち拂ふ能はじ。されば、まづ斥候兵をして、くはしく敵情をさぐらしめ、さて後、大島旅團長、長岡參謀長、福島中佐などうち

集ひて、しきりに、軍議をこらしゝが、遂に夜討ちをなさむことに決しぬ。

二十八日の夜、やうやうふけわたらむとするころ、出軍の喇叭ひゞきぬ。兵士みな枕を蹴て起つ。

さて左翼隊まづ發し。右翼隊つゞきて、本道より進む。時は、はや廿九日の午前零時すぐるころなりき。右翼の枝隊すゝみて安城川にかゝりぬ。川にかけたる橋は、はや敵のために、なかばこぼたれたり。直に、流をみだして進む。渡り終へて右に進めば、沼澤あり。水田あり。いづれも泥ふかく水肩におよぶ。辛うじてキチン村といふにつきぬ。

敵の堡壘は、こゝを去る一里ばかり。忽ち前衛の尖兵道を失へるに、松崎大尉の率ゐる前衛隊、またゝにおちあひぬ。枝隊司令官、竹田中佐、人をして道をたづねしめむとする折しも、あやしき人物ありて、一聲さけぶ。忽ち敵の伏兵かたへの民家にあらはれて、われを狙撃す。その距離わづかに數歩。夜はくらく、路はせばくして事不意におこる。我隊退きて水田の堤下に伏す。こも地利あしければ、さらに沼澤に退きて、その塘下に兵。

を開きぬ。こゝに銃をそろへて、はげしく戰ふ。この瞬間、松崎大尉は伍をとゝのへて、突進す。その兵を使ふこと、さながら鬼神の如くなりき。

この時、田邊大尉も來りて前衛を助け、砲擊頗る急なり。時山中尉、やゝおくれていたり、まさに沼澤をわたらんとせしに、戰端ははや前軍に開けぬ。敵は地理にあかるければ、出沒われをなやます。中尉は事の急なるを見て、奮然劍をふるひて、進めと叫びながら躍りて水に入る。兵士ことごとく從ひぬ。しかるに、水底、泥ふかくして進退自由ならず。中尉以下二十餘名、うらみを呑みて遂に溺れぬ。

勇將の下には弱卒なし。隊長たふるとも、兵士などてためらはむ。虎の如くたけり、狼の如く狂ひて進む。その勢あたるべくもあらず。たまたま敵の騎兵一隊、村のはしにあらはれ、砲擊きはめて猛烈なり。わが兵、突貫してこを退けむとす。松崎大尉は身を躍らして堤の上につッ立ちぬ。いづこよりか、敵彈とび來りて大尉の股を射ぬぐ。大尉はひるまず、劍もてその丸をえぐり出して進め

進めと號令す。折から流丸また もその頭を貫き つ。大尉は無念といひざま その まゝたふれぬ。あはれ大尉の死は名譽の死なり。そをきくもの誰かその身を捨てむことを思はざらむ。君が芳しきほまれは、その名におへる松のみどりの、いやとこしへにくつべしやは。

この時、白神源次郎といふ喇叭卒あり。盛に進擊の曲を奏せしが、その聲とみに低くなりぬ。しばしは、かすかにひゞきしが、遂には全くきこえずなりぬ。こは彈丸その咽喉を貫ぬきたるも玉の緒のたゆるまでは、なほ喇叭を吹きつゞけしなり。實にけなげなる。

勇士にこそ。

松崎大尉の死を見たる兵士は、勇氣ますます加はり、怒濤のうちよするが如く、突貫して敵勢へかゝりぬ。この勢に、敵は一支へも支へえでにげ走るを、すかさず追ひゆきて、いよいよ成歡の敵壘へとせまる。

夜もあけぬ。わが軍は、勢に乘じてすゝみに進む。彈丸雨の如く、砲煙天をおほひ、やがて第一壘ぬけ、第二壘また落されたり。第三、第四、つゞきて陷り、遂に午前五時半といふころ、前後の六壘、みな我手におちたり。敵は旗をすて、砲をすて、副提督聶志成は軍中の日記さへうちすてゝ、にげゆきぬ。その壘上はやう。我聯隊旗は朝風にひるがへり、皇國万歳の聲、どよめきわたりぬ。

わが軍は、こゝに英氣を養ひ、いよいよ牙山の本據をつかむとて、夕つかた、そこにいたれば、敵はことごとく逃げ去りて、影だに見えず。たゞ彈藥兵糧のみ、山の如く殘しあり。我兵の勇氣にひきかへ、清兵の怯懦なる、武器などうちすつるのみか、多くは韓民のさまに身をやつして遁れたり。

ことに、提督葉志超の如きは婦人の服をつけて走れりとなむ。

(十三)凱旋式

京城の南一里ばかり、郊野ひろきところ、緑門高くそばだてり。門の内外、歡聲湧くが如きうちに、鑼太鼓の音たちまち起りぬ。やがて大軍列をたゞして進み入る、これ我軍の凱旋して、今かへりきたるなりけり。

はじめ、牙山の戰捷の報、京城に達するや、わが公使館、および居留民のよろこび、ひとかたならず。直に一大式をあげて、そを歡迎せむとて、こゝに式場を設けたるなり。その緑門の高さは殆四丈。その扁額には牙山のかたにむかひたるを凱旋門と大書し、京城のかたにむかひたるを歡迎門と大書せり。公使館員は牛を屠りて、酒をすゝめ、居留民は氷を出して、その勞を稿ふなど、すべての準備全くといふべし。

この日、大鳥公使は通常禮服をつけて式場にのぞみ、また朝鮮國王の勅使李允用、軍國機務所員總代鄭敬源など、つゞきて來たれり。緑門の前、小

河あり。凱旋軍は、くさぐさの分捕品をさきだて遥くこの流の南岸に集る。この時、歡呼の聲一時におこりぬ。

やがて、大島旅團長は長岡參謀長と共に、小橋をわたりて、しづしづと進み來れば、大鳥公使はこを式場にむかへたり。公使、まづ旅團長にむかひて、凱旋の祝詞をのぶれば、旅團長は歡迎のかたじけなきを謝す。つゞきて鄭氏は、軍國機務所員一同の總代として來れるよしをのべ、李氏は朝鮮國王の勅命をつたふれば、旅團長は一々これらに答禮をなせり。かくて公使は一聲の喇叭と共に、天皇陛下万歳を唱へ、つゞきて旅團長は朝鮮國大君主陛下万歳、鄭氏は大日本國皇帝陛下万歳を唱ふ。そのたびごとに衆みなこれに相和し

ぬ。

これより歡呼の聲なりもやまず、殆ど山河をうごかさむすもこの聲よ、實にわが官民が、滿腔のよろこびを發したるものなり。この時、わが軍人のこゝち、あはれいかなりけむ。

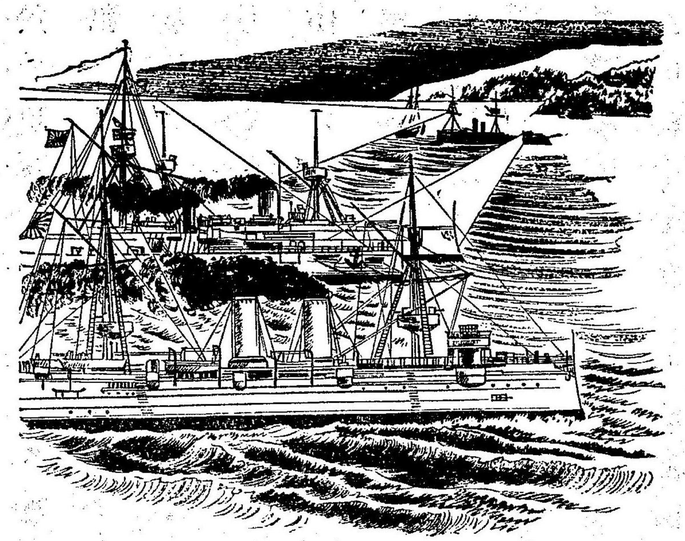
(十四)わが艦隊威海衛をおそふ

威海衛と旅順口とは、まことに清國の咽喉にして、その砲臺の堅固なること、ともに宇内にきこえたり。されば、こを一たびわがものとなさば、天津をぬき、太沽をおとしいれ、進みて北京に入らむこと、また難きにはあらず。

豐島の海戰にて、敵はいたく我威武におそれけむ、かの北洋艦隊は、定遠、鎮遠等の巨艦をもちながら、いづちへか、ひそみて、黃龍旗のかげだに見えず。我艦隊はこれらの小戰に勝を得たりとて、などか、あき足るべき。いかにもして、かの艦隊にめぐりあひ、以て一快戰をなさむとて、勇みに勇みき。

こゝに八月十日、月は海原におちて、夜いまだ明けやらず。見わたすかぎり、いとくらきこゝろ、わが

軍艦二十艘は、うちつれて威海衛へとむかひぬ。はじめ、われは偵察艦をいだして、港内のありさまを窺はしめしに、敵艦十艘、碇泊せりとのことなりしかば、わが艦隊は、ひそかにそを襲はむとて燈を消し、聲をひそめて、そのあたりに近きしに、敵艦はいつちゆきけむ、はやのがれ去れり。こは、さきに、某國軍艦は、わが進發するをさぐりて、はやくも敵艦へ、そのよしを告げたるなりけり。されば、わが艦隊は、せむかたなく、方向を渤海灣の南へうつさむとて、長山島と芝罘との間をす



ぎしに、かの某國の軍艦は、たちまち我にむかひて、禮砲を放ちぬ。その聲、海波をうでかして、遠く數里のほかまで、ひゞきわたりぬ。それ、夜間、發砲をなすことは、海軍の法

に於て、ゆるさざるところなり。かれよして、これを犯したるは、わが進撃を妨げむの意よいでたるなりこの時、わが將士の心はいかよ皆腕をさすりて、このうらみを晴らさむと、いひあへり。」

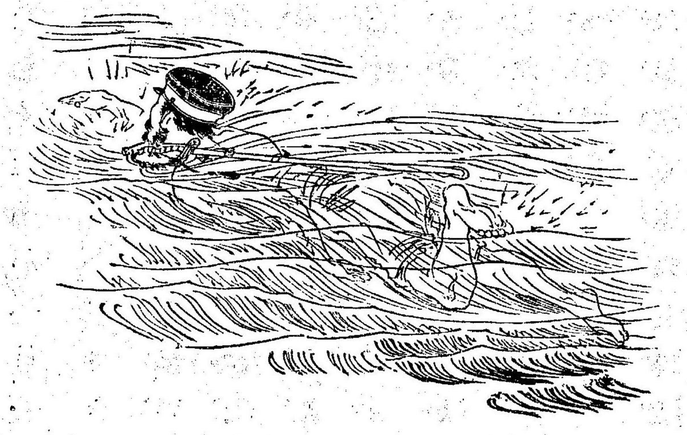
長山島および芝罘わたりの砲臺は、この砲聲におどろき、直に電燈をてらして、我をうかゞひ、にはかに發砲をはじめたり。我はしばらく、これに應戰しつゝ、進みて海峽をとほりぬくれば、かなたの灣内に、敵艦六艘を見いでたり。いでいで、のがさじと、直にこれに迫らむとすれば、敵はこを見て、はやくも山海關のかたへと、にげさりぬ。

今は追はむも詮なしとて、わが艦隊は、そのまゝひきかへしぬ。そのかへさに、敵の報知艦一艘にあひて、これをうち沈め、直にすゝみて長山島の砲台をうち碎きつ。されど、敵艦すでに去りて、砲臺を守る兵もなければ、こを奪はむも益なしとて、我艦隊は、ことごとく、ひきあげたり。時に旭かげ、はや波のまにあらはれ、吹きわたる朝風いと。こゝちよし。

(十五)大同江

七月の末つかたばかり、わが斥候隊は、平壤の敵情をさぐらむとて、その名も高き大同江のほとりまで進みぬ。たまたま平壤の敵兵は、むかひの岸に壘をかまへむとす。わが斥候隊は、はやくもそを知り、敵兵のいまだ來らざるに、かしこへわたりて、敵の設げたる郵便電信局をこぼちくれむと、八月一日の夜、それぞれ手をわかちて、船をもとめしに、下流にあたりて一の小舟あり。皆よろこびて、これにうち乘り、むかひの岸へ漕ぎいでむとせしに、霧いとふかくして、わたることとかなはず。こゝに、その夜はむなしくたちかへり、一日へだてゝ、三日の夜、いよいよわたらむと、さきにつなぎおきし小船のところに、ゆき見しに、いづこへか流れ去にけむ、影だになし。人々意を決して、馬を乘りいれむとするもあれば、はやおよぎいだせるもあり。されど、連日の大雨に、激浪さかまきて、水勢ことのほか、あらかりければ、おほかた中ばにしてひきかへしたり。こゝに一人の下士官あり。口に劒をくはへながら、この激浪をものともせずして、およぎおよぎて、遂に大同江

の。か。な。た。に。た。ど。り。つ。き。ぬ。岸。に。の。ぼ。り。て。し。ば。し。息。ひ。て。あ。り。し。に。敵。は。そ。を。見。知。り。て。發。砲。す。る。こ。



と。頗。る。急。な。り。こ。ゝ。に。下。士。官。は。敵。艦。一。艘。を。見。い。だ。し。ひ。ら。り。と。そ。れ。に。う。ち。乘。り。て。し。づ。か。に。漕。ぎ。か。へ。り。ぬ。さ。き。に。筒。音。の。き。こ。ゆ。る。や。わ。が。隊。は。い。た。く。下。士。官。の。身。を。憂。ひ。た。り。し。に。今。つ。ゝ。が。な。く。か。へ。り。き。た。り。し。か。ば。そ。の。よ。ろ。こ。び。い。ふ。ば。か。り。な。く。皆。下。士。官。の。勇。氣。を。た。ゞ。へ。た。り。そ。も。そ。も。こ。の。剛。勇。な。る。下。士。官。は。誰。ぞ。こ。れ。實。に。軍。曹。川。崎。伊。勢。雄。氏。そ。の。人。な。り。

かくて、敵は六七千の兵を平壤にいだして、ますますその壘をかたうしぬ。八月九日の夜、わが斥

候隊は、中和にありて、何くれと敵情をさぐりつゝありしに、たちまち二百あまりの敵兵に遇ひぬ。時に、わが兵僅に十騎、されど皆死を決したる勇士なり。敵いかにおほしとも、何ほどのことかあらむとて、勇をふるひて進みぬ。竹内少尉、やうやく一方の血路を開くや、衆をさしまねきて、一先ゝをのがれむとせしに、あばれ敵丸どびきたりて、少尉を馬より おとしつ。あはやといふほどもなく、敵丸またもやとびきたりて、少尉のかたへにありし川崎軍曹の馬にあたれり。馬たふ

るゝや、やがて軍曹もまろびおちしが、足は馬の下にうちしかれて、たやすくは抜きえず。敵はやや迫りぬ。こゝに軍曹は、たふれなが ら馬を楯

どして、短銃とるよりはやく、敵兵目がけて、無二無三にうちいだしぬ。敵はそのたまにあたりて、またゝくひまに、五六人たふれぬ。敵はおそれて、後へ後へとひきかへすほどに、軍曹はやうやくおきあがり、腰なる劒をぬきはなち、またたちどころに、五六人をきりさげたり。かくていやすゝみすゝみ、雲霞のごとき敵軍の中に斬り入り、右に左に力にまかせて薙ぎたてしに、多勢をたのみし敵兵も、今はかなはじとて、後をも見ぜしてにげ去れり。あはれいさましきこの川崎軍曹、日本武士のかゞみとして、大同江と共に、そのきよき名は、末の世までもながれゆかむ。

(十六)平壤

平壤の地たるや、前に大同江の流をひかへ、北に牡丹臺の險を有し、懸崖いと高く、堡壘きはめていがめし。他にたぐひなき要害なるをもて、敵はこを本據として、義州より來れるも、大同江より上りしも、皆こゝに集れり。其數二万餘とぞきこえし。左寶貴、馬玉崑、衛汝貴等これが將たり。かつ牙山の敗將、葉志超さへ加はりて、いよいよその

勢を盛にし、われより進まずば、かれより、うちて出でむとする、ありさまなり。

九月十五日は、わが軍、平壤の總攻撃をなさむとする日なり。この日、敵を四面よりうたむとて、混成旅團は、正面より進み、朔寧枝隊は三登より迫り、元山枝隊は順安に出で、野津師團は江西よりすゝむべく、部署すでに定まれり。

かゝれば大島少將のひきゐる混成旅團は、十日より進軍して平壤街道に出で、十二日には既に發砲をはじめたり。これより期日まで、たえず砲

擊しつゝ進みしは、敵をしてこの方にのみ向はしめて、そのひまに他の三面より、はさみうたむの謀なり。おもへばこの混成旅團こそ、最も苦難のところに立ちたるなれ。されど、わが將卒もとより死を期せり。などて戰の難易をおもはむや。

大同江に橋をわたして、その南岸船橋里といふに、砲壘をきづき、以てわが正面の軍をまつなる敵の大將は誰ぞ、葉志超と馬玉昆となり。葉は、たびたび牙山の耻をすゝがめとて、いたく防禦につとめぬ。そのひきゐるところの兵、またみな

精鋭ときこえたり。

いよいよ十五日となれり。進撃の喇叭はあかつきの雲をやぶりて、ひゞきわたりぬ。わが軍すゝみて船橋里の壘をぬがむとて、たまをはげしくうち出すに、敵もかねて待ちうけしとなれば全力をつくしてこれに應じぬ。かたみにはなつ筒のおと、山もくづれ、河もさかまかむとす。見るがうちに、硝烟天をおほひ、大同江のあなたこなた、敵みかたのけぢめだにわかずかゝる中をもものともせず。わが軍は互に相はげまし、死ね、死ね。

とさけびつゝおもてもふらで、進みに進む。

さすがの敵も、この勢におそれけむ、つひに、その第一壘をすてゝにげぬ。わが兵、得たりと、ますます敵

にせまりしに、かれの高壘よりうちいだす彈丸雨のごとく、あられの如し。たけりにたけりし我兵も、おもてをむくべきやうなければ、やゝくづれむとするさまなるを、敵は、こゝなりとて、うしほの如くおしよせ來ぬ。この時にあたり、わが軍はいかに苦戰せしか、その中軍の一隊の如き、皆その彈丸をうちつくしたりとなむ。

あはや今、わが軍、總くづれとならむとす。それと見るより、長岡參謀は、急に馬よりとびおり、大刀をふりかざして、眞先かけて進む。大嶋旅團長も、

死ぬべきぱこゝなるぞ、ひくなひくな」と下知しつゝ、敵壘まぢかく進むを、あなあやふし、少將をうたすべからずと、こをひきとめむとすれど、少將は聯隊旗の下に、つゞ立ちて、退かむけしきもなし。わが兵、これにはげまされて、ときをつくりて奮進し、遂に敵を、もとの地まで退かしめたり。この時少將は、腋下に敵彈をうけたれど、傷あさかりければ、たえず全軍を指揮せり。

元山津より進みたる佐藤大佐は、こゝしき山路をすぎて、順安より平壤の北一里ばかりの所に出

で、十五日あさまだき、敵のうしろを襲はむとて、北漢山より砲撃し、急に義州街道より突進す。敵は不意をうたれて、あわてふためき、日軍には、翼やあるとて、にげいだせり。わが軍苦もなく、ひだりの敵壘を乘り取りぬ。かくて城壁ことごとく我手に歸せしは、午前九時ごろにもやありしならむ。

道を朔寧にとりし立見少將が、間道よりすゝみて、平壤にちかづきしは、はや正面のかた、たゝかひ酣にして、元山枝隊、も背面より砲撃をはじめし時なりけり。いま敵は他を顧るひまなきを見て、立見少將は、不意に東方より進みて、敵壘まぢかにおしよせつ。敵はためらひながらも、いたく防き戰へり。わが兵をたけびしつゝ、なほも攻めたてしに、遂に悉くその砲壘をすてゝ走れり。元山、朔寧の支隊は、すでにその方面の諸壘を陷れぬ。いまは殘すところ、たゞ牡丹臺のみ。されば、兩枝隊は一軍となりて、これに向へり。敵はこゝとられてはと、死力をつくして、こを守りぬ。立見少將、まづ正面よりは山口少佐をむかはしめ、背

面よりは佐藤大佐、高田少佐をすゝましめ、北面よりは砲兵をして撃破せしむ。されど、たやすくおちいるべくもあらぜ。なかにも山口少佐の一隊、頗る苦戰のさまなれば、砲兵は榴散彈を、たえぜ放てり。敵はこの勢に、やゝおそれたる色みゆ。こゝぞといひざま、わが軍三面より、ひとしく進撃して、遂になゝる牡丹臺をおとしてけり。この勢にて、立見少將は、直に臺の下なる玄武門におしよせぬ。されど門堅くして入る能はぜ。わが軍、三たび突貫したれど、そのかひなし。折しも

原田重吉といへる一卒あり。たちまち壘壁によぢのぼり、身を躍らして内に入りぬ。死にたるか、生きたるかと、人々そなたをのみながめ居たりしに、やがて門は開かれたり。そのひまに、全軍吶喊して進み入りぬ。そもそも、原田の身は神のまもりませるか、萬死のうちに入りて、この功を奏せり。この人なかりせば、この門を開くこと能はざらむ。この門を開くこと能はずば、平壤の城をおとさむこと、かなはざるべし。あはれ、この勇士の功は、玄武門の高きよりもたかしとやいはむ。

さてまた、野津師團長の中央部隊はいかに。この日、すゝみて、山川洞につきしころ、前のかた、田野をへだてゝ、敵はすでにわれを待てり。わが兵、敵壘にむかへる山上より砲擊すれば、敵もよくこれに應ぜ。その間に、我兵の一部は、ひそかに山を下りぬ。たまたま敵の騎兵百あまり進み來ぬ。わが兵黍畑の間より出でゝ、その半ばをうちたふせり。この時、敵の大將左寶貴うち死にせしが、敵兵みな力を失ひて、大同江のかたに走れり。われ進みて、火を敵營のあたりに放つ。敵の騎兵しばしは

出没して、そを防ぎしかど、我歩兵の突貫におそれて、にげ去りぬ。我軍さらにまた火を放てば、敵壘一時にもえあがりて、炎焔天にみちみてり。この日あけがたよりのたゝかひなりしかば、敵も味方もいたくつかれたらむ、午後二時すぐるころ、各方面、ともに休戰したりとおぼえて、砲聲全く絶えたり。

わが軍は午後四時ばかり、またしも敵壘に攻めかゝりぬ。その勢さらにはげしければ、さすがに堅き平壤城も、まさにおちいらむとするさまなり。この時、敵は白旗をたてゝ降るを乞ひつゝ、城を明朝までに渡さむといふ。そは一夜の猶豫を得て、遁走の用意をなさむとなり。われは、そを知りたれど、ことさらにその乞ひをゆるしぬ。かくて、ひそかに兵を義州、甑山の街道に出して、その走路をうたしめむとす。

敵は案の如く、夜に入りて悉くにげいだせり。ことに甑山街道のかたは、ことさらに逃路をあけたれば、敵はむらがりて出づ。わが兵、はげしくこれを追ひうつに、敵も死をきはめて、その血路を

ひらかむとす。やみの夜なれば、彈丸は、いなづまの飛び交ふが如く、すさまじとも、すさまじ。この時、義州街道のかたにも、筒音おこりぬ。にげゆく敵は、われより大砲小砲をうちかけられて、たふさるゝもの、おびたゞしく、見るまに血流れ、屍うづたかくなれり。をりしも雨はげしくふりいで、あたりの光景一しほ、ものすごし。

かくて、夜八時すぐる頃、平壤の一部は、すでに我手におちぬ。あくる十六日の朝まだき、敵は悉く去りて影だにとゝめず。平壤の城頭、はやくも旭の御旗ぱひるがへり、一時に唱ふる帝國萬歲の聲、四百餘州にひゞきわたりぬ。このめでたきしらせの、わが國に達せしは、實に我　大元師陛下が、みくるまを廣島へ進ませ給ひし日なりけり。

明治廿八年四月十七日印刷
同　廿八年四月二十日發行

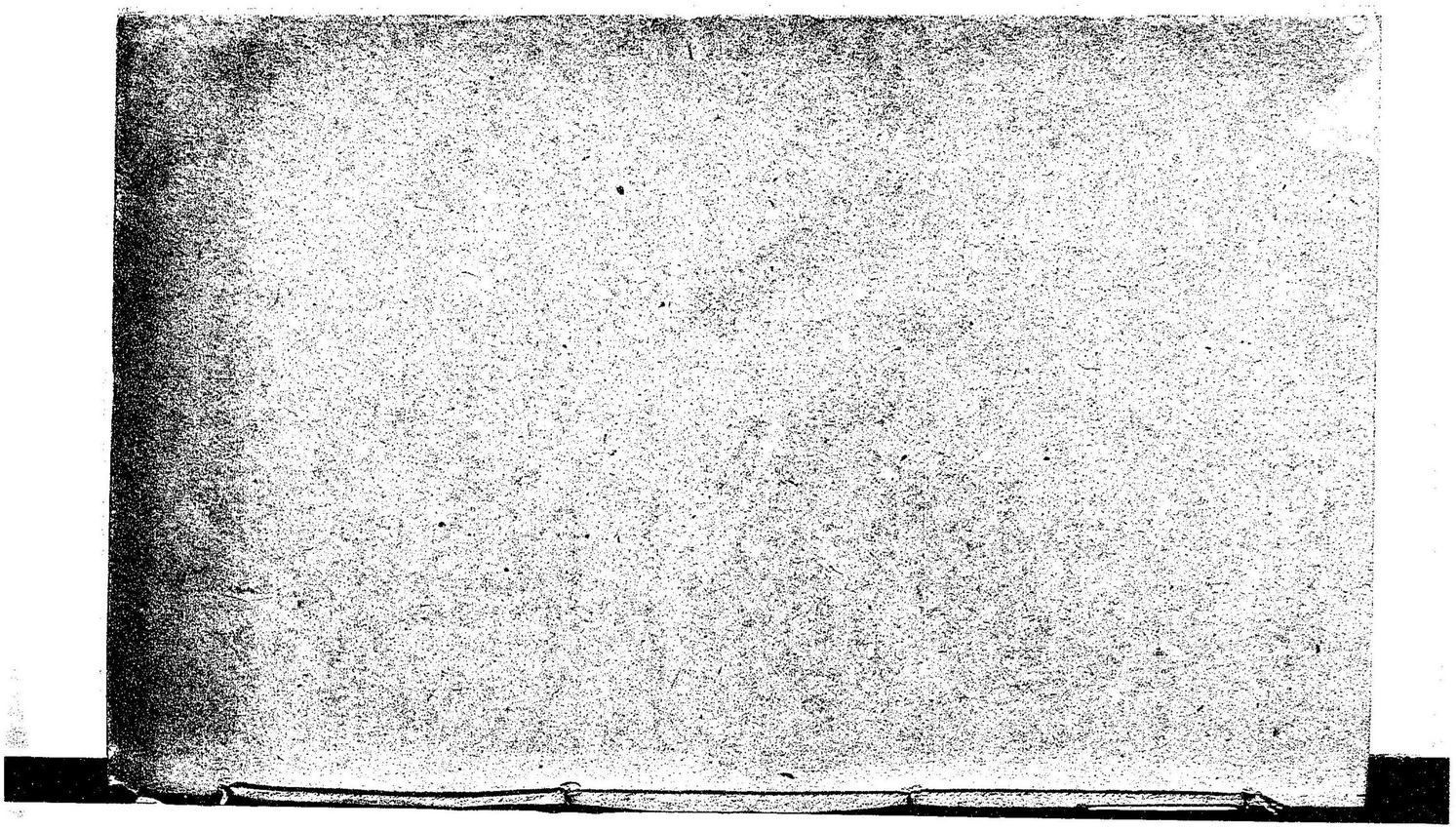
一冊正價金十二錢〇五冊前金五十七錢五厘
十冊前金一圓十錢　郵稅一冊金四錢

著者　落合直文

發行者　大倉保五郎
東京日本橋通一丁目十八番地

發賣所　大倉書店
東京日本橋通一丁目十九番地

印刷者　久米川治三郎
芝區南佐久間町二丁目十七番地

印刷所　國文社
京橋區宗十郎町十五番地

版權所有